『蒙求』「落下[数]」徐注及び『漢書』「律曆志」の解釈について：猪酔敬所・黒田梁州・佐々木向陽の取り組みと漢学教育の一側面

著者 | 桐島 薫子
雑誌名 | 筑紫女学園大学研究紀要
号 | 13
ページ | 1-16
発行年 | 2018-01-31
URL | http://id.nii.ac.jp/1219/00000960/
Kazuko KIRISHIMA

Kuroda Ryoushi and Sasakura Yo and an Aspect of Their Sociology Education

On the Interpretation of the Yochi of Ruhakushin in Mokun and Ruhakushin in Kanei: Annotations by Ito Reiya
『蒙求』「落花流水」徐注及び『漢書』「律曆志」の解釈について

桐島 薫

On the Interpretation of the Jochu of Hakkereshiu in Mougyu and Rihakreshi in Kyoji. Annotations by Ikai Keisyo.

Kuroma Ryoushi, and Sasaki Kyo and an Aspect of Their Sinology Education

Kaoruko KURISHIMA
雑抄二の巻（安政三年）- 売家（李潮標）・徐子光

補注を掲げ、「前晩ノ時見ルベ」、唐詩ノヲ典故、同書ニテ大半
知り得べしと記しており、唐詩ノ学習ノ価値意志
こうした中、明治四年（一七六七）、間白駅（六九年）
が「蒙求」注を施し、あらためて重ねた本（「蒙求」
の二四三）を出版して好評を博し、その後、版を重ねた。

（図版の一のA・B・C、その中で、「勝所ノ黒田氏」が、一七六七
年（一九五八）四月を記。この内、④の安政の四月（「蒙図」注）
を施し、逐次注を出版して優れた出版として、後に③・四考
と称す。標箋注は、幕末から明治の激務期に教科書として非常に流
行し、今日見ることができる最もボリュームをなす本である。佐々木向
陽は、現地の人で、その学識を知った周防国知淑郡知那の江口茂兵衛
などの依頼されて漢籍を教授した後、字語を帝室原の解学書院
の学頭となった。

三五八（一）に、「佐々木向陽は、「蒙求」注の一、二、三、四
における一考察の中で、次の（一）（二）（三）を初めて指摘
した。

（二）蒙図注を施すが、「蒙図」注の一、二、三、四、五
の原典である「漢書」の文を改変し、改編していること

（三）蒙図注を施すが、「蒙図」注の一、二、三、四、五
の原典である「漢書」の文を改変し、改編していること

（四）蒙図注を施すが、「蒙図」注の一、二、三、四、五
の原典である「漢書」の文を改変し、改編していること

（五）蒙図注を施すが、「蒙図」注の一、二、三、四、五
の原典である「漢書」の文を改変し、改編していること

（六）蒙図注を施すが、「蒙図」注の一、二、三、四、五
の原典である「漢書」の文を改変し、改編していること

（七）蒙図注を施すが、「蒙図」注の一、二、三、四、五
の原典である「漢書」の文を改変し、改編していること
漢書・律暦志」と「太初曆」、「三統曆」を検討する

漢書・律暦志

漢書・律暦志は、太陽の運行による暦法の遅れを示すもので、太陽暦と暦法の演進を記述している。前漢時代の暦法は、太陽暦の基礎を形成し、その後の暦法の発展を支えている。漢書・律暦志は、前漢時代の暦法の変遷を詳細に記述している。

太初曆

太初曆は、漢代の最初の暦法で、漢文帝時（前180年）に、司馬遷らが導入した暦法である。太初曆は、太陽暦の基礎を形成し、その後の暦法の発展を支えている。

三統曆

三統曆は、漢代の最後の暦法で、漢文帝時（前180年）に、司馬遷らが導入した暦法である。三統曆は、太陽暦の基礎を形成し、その後の暦法の発展を支えている。

漢書・律暦志

漢書・律暦志は、前漢時代の暦法の変遷を詳細に記述している。前漢時代の暦法は、太陽暦の基礎を形成し、その後の暦法の発展を支えている。
漢書「律曆志」上に於ける「蒙求」標題「落下歴数」の原語である。

そこで、落下閏は前述した墨法を「律にによって組み立てた」ことを、
もと、道と墨法によって推測する学問的傾向に沿った副次的な解釈と言える。

また日本音楽の十二律の一音の音で、楽律の基準となるものである。

【蒙求】標題「落下歴数」の原語原語部分と通釈[通釈]の記す。

なお、後述の説明の便宜上、原文には、傍線・番号【①】を付す。
唐都は二十八宿の度数を観測し、落下閾は度の計算をした。その方法は、音律により度を組み立てるものであった。次通りである。

黄鐘の管は、日により度を組み立てるものであった。度の度数が二十八十一度であるから、それらの管の長さは二十八十一度である。この音律の管の長さは完全に横で行うものである。

黄鐘の管の長さが二十八十一度であるから、それらの管の長さは二十八十一度である。この音律の管の長さは完全に横で行うものである。

黄鐘の管の長さが二十八十一度であるから、それらの管の長さは二十八十一度である。この音律の管の長さは完全に横で行うものである。

黄鐘の管の長さが二十八十一度であるから、それらの管の長さは二十八十一度である。この音律の管の長さは完全に横で行うものである。

黄鐘の管の長さが二十八十一度であるから、それらの管の長さは二十八十一度である。この音律の管の長さは完全に横で行うものである。

黄鐘の管の長さが二十八十一度であるから、それらの管の長さは二十八十一度である。この音律の管の長さは完全に横で行うものである。

黄鐘の管の長さが二十八十一度であるから、それらの管の長さは二十八十一度である。この音律の管の長さは完全に横で行うものである。

黄鐘の管の長さが二十八十一度であるから、それらの管の長さは二十八十一度である。この音律の管の長さは完全に横で行うものである。

黄鐘の管の長さが二十八十一度であるから、それらの管の長さは二十八十一度である。この音律の管の長さは完全に横で行うものである。
猪飼敬所撰『黒田梁州写蒙求卷中落下歴数律考』に掲載された文章の一節です。

【原文】

猪飼敬は、天保九年（一八三八年）の伊勢参宮を皮切りに、その後の数年間、伊勢参宮に同行を許可され、足代弘訓の詩を詠み、宮崎神社での講義を続けました。文政元年（一八二八年）には、黒田五右衛門を訪れた際に、三日間見物の旅をしました。

【博業】

黒田五右衛門は、足代弘訓の詩を詠み、宮崎神社での講義を続けました。文政元年（一八二八年）には、黒田五右衛門を訪れた際に、三日間見物の旅をしました。

【註】

この文章は、『漢書』に引用されているが、『漢書』の内容をそのまま引用しています。
（＜図＞）「駅ビール
ビール」の「駅ビール
ビール」のイラスト

（＜図＞）「駅ビール
ビール」の「駅ビール
ビール」のイラスト

（＜図＞）「駅ビール
ビール」の「駅ビール
ビール」のイラスト

（＜図＞）「駅ビール
ビール」の「駅ビール
ビール」のイラスト

（＜図＞）「駅ビール
ビール」の「駅ビール
ビール」のイラスト

（＜図＞）「駅ビール
ビール」の「駅ビール
ビール」のイラスト
山中的树林倒映在小湖中。小湖的另一边是一片茂密的森林，森林中有很多小鸟在飞来飞去。湖面上的水波不断，反射着天空的蓝色。

（注：图中出现的符号可能无法准确识别，建议使用合适的工具进行转换。）